

大人たちが「たたら吹き製鉄」を体験

▼木原村下(右)とともに砂鉄を装入する参加者



三月十七日、十八日の二日間、大呂の(株)日立金属島上木炭鋳工場(日刀保たたら)で、一般住民を対象にした「たたら吹き製鉄体験」が行われました。

たたら吹き製鉄体験は、町内小・中学生を対象に毎年行われていますが、地域の伝統文化であるたたら製鉄をより身近に感じてもらうと、町教育委員会などでつくる奥出雲町地域活性化実行委員会(会長・安部隆教育長)が主催し、一般住民を対象に初めて開催

両日合わせて、県内外から約百五十人が体験・見学に訪れました。

期間中、国選定保存技術保持者の木原明村(下)や村下養成員の指導、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター、新見庄たたら伝承保存会(岡山)の協力のもと、参加者はたたら炉の築炉や木炭の装入作業などを行いました。

十七日夜には、高さ約一・二メートル、幅約〇・六メートル、長さ約一・二メートルの粘土製の炉に、参加者が木原村下とともに最初の砂鉄を装入。十八日昼まで、木炭五百七十九キログラムと砂鉄



▲炉づくりの様子



▲鑄出し作業の様子

二百六十四キログラムの装入が続けられました。

十八日昼から行われた鑄出し(窯崩し)作業では、炉の熱と格闘しながら、参加者が力を合わせて炉を崩し、百キログラムを超える鉄塊「鑄」を取り出しました。

炉が崩され、火の粉が舞う度に、参加者や見学者から大きな歓声が上がっていました。

また、十八日には、同工場にある角型溶鋳炉(国登録有形文化財)の見学会が行われるなど、参加者にとって、体験操作とともにたたら吹き製鉄の歴史と奥深さに触れる、貴重な機会となりました。

俳優の佐野史郎さん

「ブックカフェ奥出雲」でトークと朗読

▼佐野さん(左)の朗読に聴き入る来場者



本に関する様々なイベントで本や物語の素晴らしさを伝えようと活動する、ボランティアグループ「ポケット」が主催し、「ブックカフェ奥出雲」が三月二十五日、カルチャープラザ仁多で、開店しました。

今回は、松江市出身の俳優・佐野史郎さんを迎えたトークショーと朗読が、午前と午後二回行われ、約

百五十人が来場しました。トークショーでは、佐野さんが俳優を目指した経緯のほか、本や読書との関わりについて話し、続いて行われた朗読では、小泉八雲作の怪談「耳なし芳一」を約一時間に亘り朗読しました。

音楽や効果音が全くない中でも、様々な声色や抑揚のある語り口で物語の世界を展開する佐野さんの朗読に、来場者は聴き入っていました。

また、この日出雲市から訪れた女性は「今まで経験したことのない語りの間や強弱で、物語の場面をイメージできるような朗読だった」と満足そうに話していました。

当日はこのほか、井上町長による古事記の朗読、小学生による落語、恒例となった「一箱古本市」などが行われ、来場者にとって本や物語に触れる良い機会となりました。

主催した「ポケット」の飯國淳子代表は「ブックカフェをはじめ、本と人、人と人とのつながりを持つ空間を今後もつくっていききたい」と話されました。

高齢者が自立し安心して暮らせる町を目指して

「奥出雲町老人福祉計画」を策定

高齢者が自立した生活を維持し、住み慣れた地域で安心していきいきと暮らせる町づくりを目指すための基本計画となる「奥出雲町老人福祉計画」が策定され、役場仁多庁舎で3月26日、策定委員会の岩佐捷治委員長と須山春雄副委員長が、井上町長へ報告に併せ計画書を手渡しました。

同計画は、雲南地域第5期介護保険事業計画や奥出雲町総合計画との整合性を図りながら、福祉関係者や地区福祉振興協議会代表など20人の委員により、12月から策定・審議を開始。町全体で高齢者の生活を支える環境・仕組みづくりのため、7つの基本方針を定めています。

今後は、この計画をもとに医療・介護・福祉分野だけでなく、地域全体が連携した高齢者支援施策が進められていきます。



▲計画書を手渡す岩佐委員長(中)と須山副委員長(右)

課題解決に向け、より具体的に

奥出雲町障がい福祉計画 第三期計画を策定

▼策定委員会の様子



障がいのある人、ない人に関わらず、住み慣れた町で自分らしく過ごすことができるまちづくりを目指すための「奥出雲町障がい福祉計画」。

平成二十四年度から二十六年までの三年を期間とする第三期計画が策定され、三月二十一日、策定委員会の大谷隆壽委員長が、勝田副町長に策定の報告を行いました。町今期計画策定にあたり、町

内の障がい者約四百二十人にアンケート調査を実施。その結果をもとに、障がい福祉関係団体代表者や障がい福祉事業者など十七人の策定委員により策定を進めました。

その結果、障がい児の就学・通学支援や障がい者の就労支援をはじめとする、第二期計画にはなかった、八つの重点課題と実施のための具体的方策が新たに盛り込まれました。

今後は、住民と関係機関が連携して計画を推進していきます。

仁多発電所 JA雲南から町へ寄贈

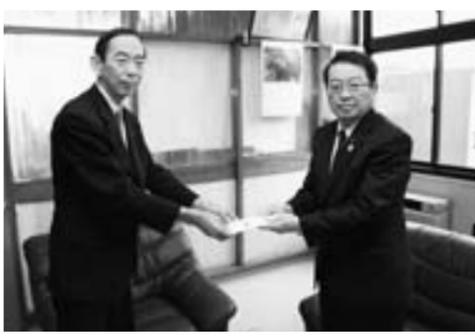
三成にある「仁多発電所」が雲南農業協同組合から町へ寄贈されることになり、三月三十日、役場仁多庁舎で引渡式が行われました。

仁多発電所は、昭和三十七年三月に建設された、年間約百六十万キロワットを発電する小水力発電施設です。

事業主体であった、建設当時の布勢三成・亀嵩の三農業協同組合から委託を受け、こ

れまで町が運営を行ってきた。電気事業法の改正により発電所の町営化が可能になったことや、関係水利権の更新に併せ、この度、施設が町に引き渡されることになりました。

式では、雲南農業協同組合の吾郷生善代表理事組合長から井上町長に目録が手渡されました。



▶井上町長に目録を手渡す吾郷組合長(右)